

## アジア太平洋研究科 博士學位論文要旨

### ホームレスの高齢者における再発予防に資するソーシャルキャピタル —日本の山谷および釜ヶ崎の事例からの分析—

4013S3055

岡本菜穂子

主指導教員 勝間 靖 教授

**Keywords :** ホームレス, 高齢者, 再発予防, ソーシャルキャピタル

ホームレスの存在は 21 世紀以前から重要な社会問題として認識されてきたが、その人口規模、拡大速度、家族やコミュニティの弱体化の程度から考慮すると、これまでとは異なった問題解決の方策が求められている。世界ではホームレス人口の増加は止まることがなく、中でも 50 歳以上の中高年層のホームレス人口は増大している。そのような状況下、50 歳以上になり初めてホームレスになる者の増加等が明らかになっており、高齢化社会の大きな解決課題である。

特に高年齢層ホームレスは、路上生活からアパート等へ移行したにもかかわらず、社会的なつながりの少なさ、見知らぬ土地での生活への適応に時間がかかることに伴い、引きこもりや生活の自己管理の難しさなどの問題が生じやすく再路上化しやすいという特徴がある。

ホームレスに至る要因は、健康を害したことに伴う失業、家族不和などの個人的要因 (Warnes & Crane, 2010; Early, 2005) による結果であるとの見解が歴史的に長く支持されてきた。その後、不景気や住宅費の高騰等、個人ではコントロールできない社会全体の構造的な要因へと議論の重点が移った。ホームレスに至る要因に社会構造的か個人的かの二項から議論される中、ホームレスにつながる様々な危険因子と、多くの複合的な因子が相互に作用する論が多くの研究者から支持されている (Cohen, 1999; Crane & Warnes, 2001)。高齢者がホームレスになる要因はひとつではないが、その特徴は高齢者の多くは病気や障害になるリスクが高くそれらに伴う仕事の喪失、高齢であることを理由に住居からの立ち退きを強いられる、伴侶の死去など頼れる家族の喪失が関係している (Cohen, 2012)。また、その発生誘引となる要因は加齢により再就労する機会が乏しく就労を通じた社会的役割の喪失や居場所のなさ、他者との関係の欠如や、社会保障制度を含む社会との関係の喪失がある (Crane & Warnes, 2001; Hecht & Coyle, 2001)。高齢者ホームレスの再発要因については、安定した住居や経済的保障の欠如、見知らぬ土地での生活上の不適応、生活の自己管理困難に加えて、継続的なアフターフォローの喪失、地域生活でのセルフマネジメントを促す他者からの精神的サポートの欠如、ソーシャルネットワークからの排除がある (Crane & Warnes, 2002; 山田, 2020)。これらの再発要因の発生を予防する方策として、高齢者へ安定した住居の確保と公的給付を受給すること、加えて他者との人間関係の回復や同じ境遇にある人同士のピアサポート、すなわち社会的関係とコミュニティが重要であると指摘されている (Crane, et al., 2006)。しかしながら、上述の支援を得て定住化を一旦果たしても再びホームレスへ戻る事例は減らない (Chamberlain & Mackenzie, 2016)。なぜホームレスの高齢者はホームレス状況から脱したにもかかわらず、再びホームレスになるのか、この疑問を解明するためには彼らが現状としてどのような中で生活しているのかという実態を把握することが必要である。把握した実態から彼らが暮らす地域における「人間関係とコミュニティ」が、再びホームレスになることをどのように予防しているかを具体的に探る必要がある。本研究の目指す目標は、高齢者のホームレス再発化を予防するソーシャルキャピタルを探究することである。

本研究は日本の成功事例の観察等を通じてソーシャルキャピタルという概念的枠組みを用い、ホームレス高齢者の生活における再発を予防すると考えられる要因を抽出する。欧米諸国では青少年や女性、家族、成人、高齢者と多様な層のホームレスが点的に存在しているが、日本ではホームレス人口の大半を単身中高年男性が占めている。さらに彼らの多くは単身中高年男性が多く集住する特定の地域の中

で独特なコミュニティの中で生活をしている。日本のホームレスの高齢者の生活は、本研究課題の解明に適した事例である。

日本のホームレスの高齢者の事例研究を通して、本研究で達成しようとする目的は次の 2 点である。1. 日本の高齢者ホームレスにおける再発予防の実現に寄与する人間関係の解明。2. 日本の高齢者ホームレスにおける再発予防に寄与するコミュニティの解明。

本研究の主要設問は、日本の高齢者ホームレスの生活にはどのような人間関係とコミュニティが存在しているのかである。この設問に対し以下のようなリサーチクエストionsに答える。

RQ1) ホームレスから脱した高齢者の生活の過程はどうであったか、特に人間関係とコミュニティの視点から

RQ2) 再定住した高齢者たちの問題としてどのような課題が浮かび上がったのか-主体間のつながり-

研究手法は、日本の山谷および釜ヶ崎で生活するホームレスから脱した高齢者とホームレスを継続している高齢者の事例研究である。

山谷と釜ヶ崎は日雇い労働者が集積する寄せ場 (労働市場) と、歴史的に簡易宿泊所が集中する街の機能を持った土地である。これらの土地で暮らす対象者の生活の実態を探るものであり、回答状況が明確である対面式調査法を用いた。

データ分析の結果、家族、親族や友人のような強い紐帯が存在していなかった。ホームレスから脱した高齢者もホームレスを継続している高齢者のどちらも人間関係の脆弱性を抱えて生きている実態が浮き彫りになった。しかし家族とのつながりを持たずとも、高齢者ホームレス同士の間には感情を共有することや、他者とのつながりを実感できるものであることが明らかになった。同じ境遇にある人との関係、困った時に相談できる人との関係、信頼を寄せられる人との関係、気心の知れた人との関係はホームレス再発を予防することにポジティブに影響を与えた。一方で、路上生活をしてきた時の知り合いや、元野宿仲間との関係は再発を予防することにネガティブに影響を与える。自己決定が尊重され、主体者になることができるコミュニティ、帰属意識が形成されるコミュニティ、同質的社会的ネットワークを包摂するコミュニティが再発を予防することにポジティブに影響していた。一方で、集いの場やボランティア活動に参加しない人やしたくない人も多くいることから、持て余す時間をギャンブルなどで費やす術しかない人々は再発しやすいと考えられた。

当事者であり支援者でもある高齢者ホームレスは、コミュニティの主体者であり、自らが行動することにより安定した住居を維持することに繋がっていた。孤立や孤独を抱えるホームレスの高齢者にとって、主体者となりうる仲間としての人々の重要性和価値を見失わないようにすることが重要である。

#### [主要参考文献]

- Chamberlain, C., & Mackenzie, (2016). Homeless careers: A framework for intervention. *Australian Social Work*, 59(2), 198-212.
- Cohen, N.H. (2012). Aging and Homelessness in New York City. *Revzzin Center on Aging*, Fordham University, 1-78.
- Crane, M., & Warnes, A. (2001). Older People and Homelessness: Prevalence and Causes. *Topics in Geriatrics Rehabilitation*, 16, 1-14.
- 山田 壮志郎編 (2020)。ホームレス経験者が地域で定着できる条件は何か: パネル調査からみた生活困窮者支援の課題, ミネルヴァ書房。